

日本語での読書が英語習得に及ぼす影響

～ EFL 学習者とのインタビューに焦点を当てて～

環境人間学研究科 環境人間学専攻

◎M1 よしだあずみ 吉田安曇、教授 てらにしまさゆき 寺西雅之

キーワード

日本語での読書、英語習得、EFL 学習者、インタビュー分析

研究概要

近年、加速するグローバル化にともない、「世界共通語」としての英語の果たす役割に注目が集まっている。日本でも、英語の早期教育が叫ばれ、英語熱がますます高まっているが、幼少期に英語を始めるより、思考力・分析力の基礎が固まるのを待って、英語学習を始める方が圧倒的に効率的だとする主張もある（大津由紀雄、2007『英語学習 7つの誤解』）。また、斎藤（2007）は、外国語学習には、まず高度な日本語運用能力を身に付けることが必要だと述べている（『これが正しい！英語学習法』）。確固たる母語能力の構築には、読書の果たす役割が大きいと考えられる。その一方、日本に加えてイギリス等英語圏の国々でも、特に若い世代における国語力の乱れが憂慮されており、近年読書の大切さが再認識されている。本研究では、量的研究と質的研究を合わせた混合法の手法を用いて、まず、大学生・一般社会人を対象にアンケート調査を実施した。その結果を踏まえ、幼少期によく読書をしていて、なおかつ今現在英語が得意だと回答した EFL 学習者に個別のインタビューを行った。インタビューでは、読書体験の具体的な内容、小・中学校時代の国語や英語の成績、国語力と英語運用能力の関連性の有無、さらには自身の英語学習に関する考え等について尋ねた。これらのインタビュー内容を質的に分析することにより、読書が堅固な国語力を構築し、またその国語力が外国語としての英語の習得にも有意な影響を及ぼすということを検証していく。

アピールポイント

本研究の目的は、日本語での読書が高度な母語運用能力を築き、それが外国語としての英語習得においても有意な影響を及ぼすことを明らかにすることである。近年、ますます英語の必要性が叫ばれるようになり、英語教育の低年齢化が進んでいるが、英語を学び始めるのが早ければ早いほど、英語習得度が高くなるのだろうか。本研究では、母語である日本語能力をしっかりと身に付けることこそが大切だと考える。先行研究において、明治時代などの英語の達人の学習についての伝記的な考察はあるものの、現代の EFL 学習者の生の声を聞き質的に研究した例は少ない。そこで本研究では、幼少期よく読書をして、なおかつ今現在高い英語力を持つ EFL 学習者を対象にインタビューを実施した。その内容を質的に分析した結果、いくつかの共通項が見られることが分かった。例えば、読書を好きになったきっかけとして、近隣に図書館がありよく通っていたことや、家族が読書好きだったということが挙げられる。また、読書が好きだった人の大半は、概して小・中学校では国語の成績が良かったようだ。自身の国語能力の高さが英語を学習する際、例えば、長文読解、文章作成能力などの点において、何らかのプラスの影響を与えてきたと自覚している人も少なくない。以上のようなインタビュー分析の結果を踏まえて、読書が日本語力を伸ばし、またその高い日本語能力が、英語を理解し運用する際においても有意な影響を及ぼしているという点について検証していく。